

# 近代における近江商人正野玄三家の雇用形態

Employment System of the Shono Family in Modernization

上 村 雅 洋  
Uemura, Masahiro

## ABSTRACT

We have already clarified about the actual condition of the servants of the Shono family in the Edo period. I want to clarify the following points in this paper. How did the employment system seen in the Shono family of the Edo period change after Meiji Era? How did the Omi merchant's employment system remain in the Shono family? We analyzed employees' actual condition using employee list of names. As a result, in the Shono family, it became clear that the employment system of the Omi merchants since the Edo period was maintained.

## はじめに

近江商人正野玄三家<sup>(1)</sup>の江戸時代の奉公人の実態については、これまで明らかにしてきた。そこでは、次のようなことが具体的に明らかになった。正野家には常に 15 人程度の奉公人が在籍し、奉公人はほとんど蒲生郡日野町を中心とした近江出身者であり、出仕年齢は 10 歳代前半であった。彼らは 20～25 年間奉

(1) 正野家に関する研究としては、西川嘉男「元禄・享保期における前期的資本の動向」(『史林』第 42 巻第 5 号, 1959 年), 脇田修「元禄・享保期近江商人の一経営——日野・正野家『惣勘定仕上帳』について——」(『国史論集』読史会, 1959 年), 本村希代「近江商人の創業期の軌跡——初代正野玄三の場合——」(同志社大学『経済学論叢』第 54 巻第 4 号, 2003 年), 同「近江商人正野玄三家の合業流通」(『経営史学』第 39 巻第 3 号, 2004 年), 同「明治期における近江商人の企業家活動——正野玄三家の事例——」(『企業家研究』第 2 号, 2005 年)がある。

(2) 拙稿「近江商人正野玄三家の事業と奉公人」(徳永俊光・本多三郎編『経済史再考』思文閣出版, 2003 年), 同「近江商人正野玄三家の奉公人と給金」(『大阪大学経済学』第 54 巻第 3 号, 2004 年)。

公し、35～40歳で別家が許された。彼らの積金は出仕した年から積み立てられ、100～130両が別家時の家屋敷料等に充当された。給金は出仕から10年間は支給されず、生涯給金にあたる給金合計は50～60両であった。別家に際しては100両の家屋敷料と10両の道具料や長崎屋の家号、暖簾、掛物、盃、脇差、麻上下などが渡された。別家には、本家の支障となる商売、本家に差し支える縁組などは禁止され、本家中心の家業維持体制が要求されたという内容であった。また、正野家の奉公人には、店方奉公人、乳母・下女、男衆がいた。店方奉公人の給金は年給で10両を上限とし、2～10両の範囲で支給されていた。男衆の給金は2～3両で固定されており、格差は少なかった。乳母・下女の給金は1～2両2分で、乳母の方が厚遇されていた。店方奉公人の給金は年額で支給され、奉公人が1～2か月に1度ずつ1分～1両ずつ引き出し、退職時に清算する仕組みになっていた。奉公人に対し、盆前と暮とに仕着を行い、奉公人の階層に応じて仕着・祝儀が与えられた。奉公人には給金や仕着などの定期的な金品の支給だけでなく、褒美金も支給された。

このような江戸時代の正野家において見られた近江商人の雇用形態が、明治期以降どのように変化して近代的な雇用形態へ脱却していったのか、近代的な雇用形態へ変容しようとしていったのか、あるいはいかに近江商人に見られた雇用形態を維持していったのか、江戸時代における同家の雇用形態と比較しながら検討してみることにする。それは、近江商人の近代化の問題にまで深く関係している。<sup>(3)</sup>特に、本稿では店員名簿を中心に店員の具体的な動向を分析することによって、その点を追及してみることにする。<sup>(4)</sup>

(3) 近江商人の近代化については、拙稿「近江商人の近代化」(安岡重明編『近代日本の企業者と経営組織』同文館出版、2005年)参照。そこでは、近江商人を「近江国に本拠をおく、他国稼商人のこと」という定義に基づき、その在地性、家業組織、雇用形態の変化に注目して分析をした。

(4) 明治期における正野家の家則・店則に見られた雇用形態の変化については、拙稿「明治期における近江商人正野玄三家の家則と店則」(滋賀大学経済学部附属史料館『研究紀要』第39号、2006年)を参照。そこでは、本家と本店との区分の明確化、月給の導入など新たな試みも見られたが、支店開設に伴う在所登り制度の登場や江戸時代以来の仕着制度、別家制度の継続、さらに家長権限の強さなど依然として江戸時代以来の雇用慣行の根強さが見られた。

## 1. 明治 20 年「雇人名簿」

ここでは、明治 20 年 1 月に作成された「第弐号」と表紙に記された「雇人名簿」<sup>(5)</sup>を分析して、その特色を見てみることにしよう。

この史料には、明治 20 年時点で在職していた店員およびそれ以降明治 24 年までに雇用された店員の 38 人が記載されている。そこには、店員の氏名、住所、続柄、誕生年月日、雇入年月日、雇主場所、証人住所・氏名、店員履歴などが書き込まれている。この名簿は、明治 18 年 12 月の「江州日野商人組合規約」<sup>(6)</sup>にある「江州日野商人組合雇人規程」<sup>(7)</sup>に基づいて作成されたようであり、名簿の用紙は「江州日野商人組合雇人名簿用紙」が使用されている。その規程によれば、「凡ソ雇人ヲ使役スルニハ、猶我子弟ニ於ケルゴトク専ラ慈愛ヲ旨トシ、事々教養ヲ加ヘ、他日立身出世ノ道ヲ開カサルヘカラス故ニ」雇主の義務として、次のような点をあげている。「第一、学齡未滿ノ雇人ヘハ、相当教育ヲ施スベシ」「第二、雇人病氣ニ罹ルトキハ、百日間ハ雇主ノ宅ニテ休養セシムヘシ、尤モ療養費ハ病者ノ自弁タルベシ、但不品行又ハ教諭ニ従ハサルヨリ発シタルモノハ、休養セシムルノ限ニアラズ」「第三、雇人ヲ虐使シ、若クハ約束ノ給料ヲ与ヘサル等ノ事アルベカラス」「第四、故ナク雇人ヲ解放スヘカラス、若シ家政上不得止事故アリテ解放スルトキハ、六ヶ月以前ニ其趣キ雇人ヘ通知スル乎、又ハ三ヶ月分ノ給料ヲ与フヘシ」「第五、雇人ヨリ解傭証書ヲ求ムル時ハ、之ヲ与フヘシ、但解傭証書ニハ解傭ノ事故及将来関係ノ有無等ヲ記載スベシ、但不品行等ニヨリ放逐シタル者ヘハ解傭証書ヲ与ヘサルモノトス」とあり、雇人の身分を保証している。

次に、名簿に記載されたこれらの情報を分析することにしよう。彼らの出身は 4 人を除き、34 人の者が近江出身者である。近江では蒲生郡が 25 人、甲賀郡

(5) 明治 20 年 1 月「雇人名簿」（正野玄三家文書）。

(6) ただし、店員については、明治 29 年頃までの動向が継続的に記録されている。

(7) 明治 18 年 12 月「江州日野商人組合規約」（滋賀大学経済学部附属史料館所蔵中井源左衛門家文書）。

が9人（前野村3人、水口村3人、市場村1人、南土山村1人、杉谷村1人）であった。しかも蒲生郡では、日野町が12人（大窪町6人、村井町6人）、西大路村・里口村・猫田村各2人、仲在寺村・佐久良村・中之郷村・北畑村・日田村・金屋村・杉川原村各1人であり、正野家の所在する日野町が特に多く、日野町を中心とした周辺地域から雇用していた。他府県では広島県2人、愛媛県1人、大阪市1人であった。同家の宝暦7年（1757）正月「家来年季録」に記された奉公人の出身地も、蒲生郡52人、甲賀郡11人、愛知郡6人、神崎郡5人、栗太郡2人、犬上郡1人、不明4人であり、奉公人は近江国に限られており、明治期に入っても同様の傾向が見られたことになる。

続柄は、戸主9人、養嗣子3人、長男7人、次男5人、三男1人、弟3人、不明10人であり、戸主・養嗣子・長男が19人もいる。このことから、正野家への奉公は単なる次三男の口減らしではなく、商才のある人物を雇用し、彼らも正野家から与えられる給金で、家族の生計を立てていたことがわかる。証文請人2人には、ほとんど出身村の親族と思われる人物が記載されている。

雇入年は、佐治寅吉の嘉永3年（1851）3月が最も古く、中瀬留吉の明治24年2月22日が最も新しい。名簿が作成された明治20年1月以前に雇用された者は、20人いる。名簿に記載があるのは、明治20年時点でまだ正野家に雇用されている人物であるので、それ以前に正野家を離れた者は、含まれていない。したがって、明治20年以降に雇用された店員は、明治20～24年の5年間に18人であり、1年平均3.6人となる。もちろん、彼らは厳しい淘汰の中に置かれ、一握りの店員だけが長期にわたって勤めることになる。

明治20年1月1日の時点では、18人の店員が在籍していた。江戸時代にも、ほぼ同数の店員がおり、店員数からも江戸時代の経営規模と大きな変化はないようである。その時点での勤続年数は、36年の佐治寅吉、31年の前野金兵衛、19年の木村捨吉・石田茂七、18年の正野愛吉、14年の村田治三郎、13年の島村清兵衛、11年の正野勝治郎をはじめ、8年1人、6年3人、4年1人、3年2人、2年

（8）拙稿「近江商人正野玄三家の事業と奉公人」215頁。

1人、1年未満2人となっていた。半数が勤続10年以下の若い店員であった。

38人の出仕年齢は、誕生年月日と雇入年月日から計算すると、数え年齢では、10歳1人、11歳6人、12歳6人、13歳2人、14歳5人、15歳3人、17歳1人、18歳1人、21歳1人、23歳2人、25歳1人、42歳1人、43歳1人、47歳1人、48歳1人、49歳1人、51歳1人、54歳1人、不明2人であった。<sup>(9)</sup>10歳代前半が中心であり、前述の宝暦7年正月「家来年季録」に見られた出仕年齢とほとんど大差はない。

高齢出仕者の事情を見ておくと、次のようになる。54歳で雇用された太田安蔵は、「廃藩後警吏又ハ商業ニ従事シ、明治七年ヨリ当家へ雇入、同十九年一時解傭シ、商人組合事務所ノ書記トナリ、同二十年十月再ヒ雇入」とあり、明治7年に正野家に雇用されたが、同19年には解雇され、商人組合事務所に勤めていた。その後明治20年に再度正野家に雇用されたようであるが、同23年9月には再び解雇されている。51歳で雇用された今村逸作<sup>(10)</sup>は、その前歴として「少壮農ヲ業トシ、又酒造商ノ雇人トナリ、後チ郡村駅通ノ小吏ニ属シ、維新後モ明治廿一年迄農業及ヒ郡村吏ニ断続従事シタリ」とあり、農業のかたわら郡村の小吏として生計を立てていたのを明治21年に正野家で雇用した。明治元年に49歳で雇用された石田茂七も、「元来農ニシテ、中年商業ニ従事シ、又駅通小吏ヲ為セリ」とあり、明治20年に雇用された47歳の竹村隼雄も、「廃藩後農業及ヒ村吏ニ従事シタリ」とある。43歳で雇用された外池岩吉も、「最初安政二年ヨリ当家ノ雇人トナリ、慶応年度一タヒ解傭シ、農業ヲ為シ、明治一九年復ヒ雇人トナル」とある。このように、高年齢で雇用されたものは、以前に正野家に一度雇用されていた人が再雇用されたり、農業や郡村の小役人をしていて信頼のおけ

(9) 満年齢では、9歳4人、10歳5人、11歳4人、12歳6人、13歳2人、14歳2人、15歳1人、17歳1人、19歳1人、21歳1人、22歳1人、23歳1人、41歳1人、42歳1人、45歳1人、47歳2人、49歳1人、53歳1人、不明2人であった。

(10) 本村氏によれば、今村逸作は、正野家の中でも重要な地位にあり、明治24年には正野家の当主に対し、有価証券投資について提言を行ったりした（本村「明治期における近江商人の企業家活動」）。

る者が雇用されたようである。

雇入月は、正月2人、2月8人、3月5人、4月4人、5月2人、7月1人、8月2人、9月6人、10月3人、11月3人、12月1人、不明1人であり、2～4月の春と9月の秋にやや多いものの、特定の月にあまり偏ることなく、結果として分散的に雇い入れている。

また、同史料から店員が本店か大阪支店<sup>(11)</sup>のいずれに配属されたのかが明らかになる。ただし、明治20年以前に雇用された者は、この名簿が作成された時点における配属状況を示している。それによると、本店12人、大阪支店16人、不明10人であり、不明者も本店勤務の可能性が高い。40歳以上の中途採用者は、本店3人、大阪支店2人、不明2人であり、本店勤務が多かったようである。近江出身者以外の4人のうち、愛媛県1人は不明であるが、広島県2人、大阪1人はいずれも、近江から離れた出身地に近い大阪支店での勤務であり、特殊な事情で支店勤務となったようである。

最後に、すでに高齢者の中途採用で一部紹介したが、「被雇前ノ履歴」「被雇中ノ事故」として、同史料には正野家で雇用される以前の状況や同家から解雇された状況などが記されており、興味深いのでここで紹介しておこう。前野金兵衛は、本店で「売菓々種石油砂糖糖業支配役」として勤務し、明治21年6月にはその功勞で、「江州日野商人組合雇人賞与規程」により年金3円を給され、同23年12月31日には本人の願い出により解雇された。安政2年に12歳で入店し、35年間勤めたことになる。木村捨吉は、「明治廿二年九月八日ヨリ別家分ニ進ム」とあり、別家を申し渡されている。また、同23年には江州日野商人組合賞与規程で年金2円を給されている。明治元年に14歳で奉公に来ており、23年間正野家で勤めたことになる。

解雇理由については、あまり記されていないが、「死亡ニ付解傭ス」「支店ニ於

---

(11) 正野家の大阪支店は、明治13年6月に開業されたようであり（本村「明治期における近江商人の企業家活動」18頁）、同13年6月23日の本店よりの「規定」（正野玄三家文書）や同14年7月改正の「大坂支店規則書」（同）が残されている。

テ死亡ニ付解傭ス」など死亡が3件、「脳病相発シ、種々療養致居候処、肝臓病モ併発シ、何分快方ニ運兼」といった病気が1件、「本人実父ヨリ之請求ニ付解傭」、「自宅ヨリノ請求ニ付解傭ヲ諾ス」という実家からの願い出が2件、「支店在勤中不都合有之解傭ス」「在勤中数度不都合有之シモ、(中略)且将来ニ於テ見込無之モノト認め解傭ス」「品行不十分ニシテ、将来見込無之ト認め、廿年五月廿一日解傭スル」、「都合有之、支店ヨリ直チニ解傭ス」という不都合によるもの4件などとなっている。

また、明治20年に25歳で大阪支店へ入店した広島県出身の吉田茂助<sup>(12)</sup>は、「従前大坂木綿商佐藤嘉兵衛ノ雇人ナリシニ同家廃業シ、明治二十年二月当家支店木綿商開業ニ付雇入」とあるように、大阪支店の業務拡大にともない経験者を雇用したようである。明治11年5月に11歳で入店した中澤勇蔵は、「明治廿年五月廿七日ヨリ、滋賀大津商業学校工雇主ノ貸費ヲ以テ、入校セシム」とあるように、正野家に勤務しながら大津商業学校に正野家から学資を貸与されて勉学に励んでいた。ただし、彼は不幸なことに明治24年に死亡した。

## 2. 大正2年「店員名簿」

大正2年「店員名簿」<sup>(13)</sup>は、表紙に「大正貳年十二月以降」、また内側の表のタイトルに「大正二年十二月在店員及以後雇人名簿」とあるように、大正2年12月現在で正野家に在籍していた店員に、その後入店した店員を付け加えて行った名簿である。したがって、最終的には昭和13年7月に入店した者までが記載されている。記載事項としては、「氏名」「生年月日」「本籍地」「初勤年月」「店ニテ名」「摘要」「退去年月日」が記されている。そこには合計84人の店員が掲

---

(12) 吉田茂助は、大阪支店の隣家である木綿商佐渡屋の従業員であったが、木綿取扱いのため正野家の大阪支店で雇用したようである（本村「明治期における近江商人の企業家活動」18～19頁）。

(13) 大正2年12月「店員名簿」（正野玄三家文書）。ほぼ同様の内容をもつ大正2年12月「在店員以後雇入店員名簿」（同）もあり、ここでは個々に両者を区別せず、前者を補完する形で利用した。

載されているが、最後に記されている入店者ほど、空欄が多く記載内容が少なくなっている。なお、明治19年以前に入店した古参の5人の者は、前述の明治20年「雇人名簿」と重複している。

彼らの本籍地は、蒲生郡59人で、そのうち日野町26人（うち村井10人、大窪10人）、西大路村17人、北比都佐村6人、南比都佐村3人、市原村2人、東桜谷村・西桜谷村・鎌掛村・朝日野村・甲津畑村各1人であり、75%の人が蒲生郡出身で、しかも正野家の所在する日野町とその隣接の村々から数多く雇用されているようすがうかがえる。蒲生郡以外では甲賀郡が15人（水口町5人、鮎川村4人、佐山村4人、前野村1人、伴谷村1人）、神崎郡八日市町1人、愛知郡愛知川村1人であり、滋賀県が76人で、不明者5人を除くと近江出身者が92%を占めている。他県では、三重県2人（津市、四日市）、宮崎県1人となっている。日野町を中心とした蒲生郡に集中する傾向は、前述した明治20年「雇人名簿」と変化はない。

続柄は、戸主5人、養子4人、長男16人、次男16人、三男10人、四男4人、五男3人、六男1人、孫1人、弟3人、不明21人であり、戸主・養子・長男が25人もいる。二男、三男に限ることなく、長男を含めた人材が雇用されている。

初勤年月は、木村捨吉の明治元年3月4日が最も古く、最も新しいのは高橋一夫の昭和13年7月である。大正2年12月現在で在籍していた店員に、その後入店するごとに名簿に付け加えて行ったため、大正3年から昭和13年までに雇われた店員は25年間に65人であった。毎年2.6人が新たに雇用されたことになり、前述の明治20～24年の1年平均3.6人に比べると新規雇用者が少し減少している。大正2年12月の時点での在店員は、全部で19人であり、明治20年の18人と変わらない。その時点での勤続年数は、46年の木村捨吉を筆頭に、42年の前野治三郎、41年の嶋村清兵衛、31年の田中岩次郎、28年の中西五三郎、23年の福井源吉、21年の正野光三郎、15年の松本仙吉・嶋村喜蔵・井上康次、11年の井戸光太郎、および9年1人、7年1人、4年1人、3年3人、1年未満2人であった。



生年月日と初勤年月から入店年齢を推定すると、数え年で、9歳1人、11歳5人、12歳1人、13歳6人、14歳11人、15歳11人、16歳7人、17歳4人、18歳2人、21歳1人、23歳2人、24歳3人、32歳1人、35歳1人、36歳1人、37歳1人、45歳1人、不明25人であった。13～16歳が多くを占め、明治20年「雇人名簿」に比べると、学校教育の普及によるものか、少し年齢が上昇している。

高齢出仕者の動向を次に見てみよう。45歳の青木万次郎は、大正6年3月に雇用され、同7月に東京詰となっていることから、大正4年の東京出張所設置に伴い雇用されたようである。37歳の藤井惣治郎は、大正12年に「準店員トシテ動力係トス」とあるように、動力係という特別の仕事に従事するために雇用されたようである。36歳の青木岩次郎は、大正9年に雇用されたことになっているが、「大正七年十一月四日ヨリ職工トシテ通勤セシガ、勤続効ニヨリ九年一月ヨリ特ニ店員トス」とあるように、職工として製造部門に配置されていたのが、店員として雇用されるようになったようである。35歳の嶋村清吉は、昭和2年に「本家番頭」として雇われたようであり、32歳の奥田孫左衛門も、大正9年に「根来喜三郎氏周旋ニテ本家番頭トス」とあるように、いずれもこれまでの経験を踏まえ、本家の番頭として雇用されている。これらの年長者の雇用は、それぞれ他の店員とは異なった事情によって中途採用されたようである。

雇入月は、正月4人、2月3人、3月11人、4月29人、5月5人、6月5人、7月4人、8月6人、9月7人、10月2人、11月3人、12月4人、不明1人であり、4月が突出して多く、3月がそれに続き、明治20年の「雇人名簿」に比べ、学校教育の影響が色濃く現れてきている。

勤続年数は、初勤年月と退去年月が明らかなため、計算することができる。しかし、史料の性格から大正2年以前の入店者は、同年に在職していた店員しか記されておらず、それ以前に退職した店員は史料から脱漏している。したがって、大正2年以前の入店者の勤続年数は、長くなっている。同史料に掲載されている大正2年以前に雇用された者の勤続年数は、1年1人、5年1人、8年1人、10年3人、15年1人、27年1人、39年1人、43年1人、44年1人、47年1人、不

明6人であり、勤続15年以上のすべての店員がここに含まれる。大正3年以降に雇用された店員の場合は、1年未満13人、1年4人、2年7人、3年5人、4年1人、5年1人、6年2人、7年2人、8年4人、9年1人、10年1人、13年1人、14年1人、不明22人であり、不明の中には在勤者も含まれている。しかし、勤続年数が明らかな者だけをみても、1年未満に退職する場合がかなり存在し、一部の店員を除き、勤続年数は比較的短かったようである。たとえば、大正10年7月5日に14歳で初勤した人物は、同年9月2日に「不都合ニツキ解雇」「入店セズ」と記され、見習い段階で解雇されている。また、大正11年11月25日に14歳で雇い入れられた人物も、同年12月28日に「本家詰ノマヽ見込ナク戻ス」と店に配属される前の本家での見習い段階で解雇されている。大正13年9月2日に雇い入れられた人物は、同14年に「本家詰ノマヽ見込ナク解雇ス」とあり、大正14年3月に雇い入れられた人物も同14年に「見込ナク戻ス」とあり、いずれも見習い段階でその能力が見極められ、解雇されていったようである。

退職理由は、判明する範囲では、勇退によるものと思われる退隠が3件あり、22件が願出による依願解雇（退店）であった。退店7件も同様のものと思われる。死亡は3件、病死1件、病氣3件であり、養子・「家庭ノ都合ニヨリ」は3件であった。解雇は、「不都合」・「不品行」・「店金費消」・「欠勤多ク」9件、「見込ナク」3件、「解雇」・「解」6件などがあり、「不都合」や「見込ナク」解雇される場合も多く見られた。

別家となった店員としては、この名簿から13人の者があげられる。これらの店員は正野家でも重要な役割を担っていたようであり、簡単にその経歴を見てみると次のようになる。木村捨吉は、日野町村井の出身で、明治元年に19歳で正野家に入店し、店での名前は「佐兵衛」であった。大正2年に「改メテ本店支配人トナル、大正五年七月分ヨリ隠退シ、御給金ヲ附ス、八年十二月一日死亡ス」とあり、大正5年に退隠するまで44年間正野家に勤めた。前野治三郎は、甲賀郡大野村出身で、明治5年に11歳で正野家に入り、店での名前は「政兵衛」であった。大正2年に倉庫主任となり、同9年には「病氣ノタメ引退、恩給ヲ附

ス、全九年五月七日死亡ス」とあり、大正9年に退隠するまで47年間勤めた。嶋村清兵衛は、日野町村井の出身で、明治6年に11歳で正野家に入り、店での名前は「清兵衛」であった。大正3年に「本家番頭」となり、同6年より「隠退、恩給ヲ附ス、昭和八年八月死」とあり、大正6年に隠退するまで44年間勤めた。

田中岩次郎は、日野町目田の出身で、明治16年に23歳で正野家に入り、店での名前は「岩七」であった。「本家勤」で、昭和2年に死亡しており、同年まで43年間勤務した。中西五三郎は、蒲生郡北比都佐村猫田の出身で、明治19年に11歳で正野家に入り、店での名前は「五三七、五三郎」であった。大正2年より製剤部主任となり、同10年には支配人、昭和元年11月より「顧問トナリ、恩給ヲ附ス、昭和八年四月死」とあり、昭和元年に隠退するまで39年間勤めた。福井源吉は、蒲生郡西桜谷村の出身で、明治24年に13歳で正野家へ入り、店での名前は「源七、源吉」であった。大正2年に出納主任となり、同7年11月に「流感ニテ、本店ニテ死亡ス」とあり、27年間勤めた。

正野光三郎は、甲賀郡佐山村の出身で三木佐三郎の三男であったが、のち日野の正野マスの養子となった。明治26年に13歳で正野家へ入り、店での名前は「光七、光三郎」であった。明治45年に別家し、「葉学校卒業等セシム」とある。大正2年には販売主任、同10年には副支配、昭和元年より本店支配人、「昭和十年ヲ以テ顧問トナル」とある。松本仙吉は、西大路村の出身で、明治32年に13歳で正野家へ入り、店での名前は「善六、仙七」であった。明治42年6月に「大坂北浜店ヲ閉店以来、堀江店ヨリ四十三年六月大坂主任トナリ、大二出張所開発ニ努力ス」とある。大正7年6月に別家となり、昭和11年より本店支配人を勤める。嶋村喜蔵は、日野町村井の出身で、明治32年に12歳で正野家へ入り、店での名前は「喜三六、喜三七」であった。「入店直チニ大坂詰トナリ」、大正4年4月東京へ出張し主任となる。大正7年には別家となり、同12年の震災で東京店が崩壊し、昭和11年に本店へ戻った。

日夏金助は、西大路村の出身で、明治44年に13歳で正野家へ入り、店での名

前は「兼六、兼七」であった。大正2年本店詰、同9年9月から12月まで東京詰、「以後会計主任及製剤部主任」となり、昭和2年11月に別家となっている。松村団治は、北比都佐村の出身で、大正6年に13歳で正野家へ入り、店での名前は「松六」であった。大正7年4月本家詰、同年5月大坂詰となる。その後、昭和2年東京詰、同6年大坂詰、同9年東京、同11年には本店勤務となり、同年8月に別家となった。前野弘三郎は、日野町村井の出身で、大正9年21歳で正野家へ入り、店での名前は「弘七」であった。「先代ノ後ヲ継ギ入店、十一年ヨリ倉庫主任トナル、昭和四年十月別家トナル」とあり、前述の前野治三郎の長男であった。尾林仁一郎は、日野町大窪の出身で、大正12年に15歳で正野家に入り、本店勤務となり、店での名前は「仁六」であった。昭和13年には、「別家格」となった。

このように別家となった店員は、ほとんど11～13歳で正野家に勤め、別家になるまでの年数は、19年ほどであった。明治45年から昭和13年の28年間に7人（明治45、大正7、大正7、昭和2、昭和4、昭和11、昭和13）が別家<sup>(14)</sup>しており、4年に1人の割合で別家が創出されていたことになる。また、昭和11年までは「別家」であったものが、同13年には「別家格」となっており、別家制度に何らかの変化が見られた可能性がある。また、役職も「本店支配人」「副支配」「本家番頭」「出納主任」「大坂主任」「販売主任」「倉庫主任」「製剤部主任」などを歴任し、正野家の幹部店員を構成していた。

正野家では店員に対し、「店ニテ名」として、前述したように正野家での呼称が定められていた。同家に入ると最初は彦六、嘉六、長六などと「六」が付けられ、それから6～7年経ると政七、忠七、峰七などと「七」が付けられ、その後幹<sup>(15)</sup>

(14) 残りの6人については、いずれも明治期に別家したが、正確な年代は不明である。たぶん明治20～40年代に別家したものと思われる。

(15) たとえば、仁六は仁七、重六は重七、信六は信七、善六は善七にそれぞれ改名していつている。明治19年12月「雇人二関スル諸規」（正野玄三家文書）によれば、明治20年1月1日に「本年一月以来左ノ人名頭書之通り改称ス」とあり、佐治虎吉は佐治儀兵衛、正野愛吉は正野友七、木村捨吉は木村佐兵衛、外池岩吉は外池嘉七、勝治郎は勝七、治三郎は政兵衛、兵太郎は弥七、岩治郎は岩七、勇蔵は勇七、五三六は五三郎にそれぞれ改称された。

部になると佐兵衛、政兵衛、清兵衛などと「兵衛」を付けたようである。このような名前の付け方は、江戸時代の正野家においてもなされており、男衆は「助」であり、丁稚の「六」名前も元服すると「兵衛」名前に替えたようである<sup>(16)</sup>。こうした正野家における店員の呼称慣習が、そのまま昭和に入ってもまだ存続していたようである。

最後に、「摘要」において興味のある記述がなされている店員について述べておこう。明治44年4月に11歳で雇い入れられた岡崎孝は、「本家詰中小学校へ通学セシメ、大正三年十一月本店詰、六年三月大坂詰兼夜学二通ハス、大正七年六月薬学校へ入レ、八年一月本店詰トス」とあり、また前述した正野光三郎も薬学校を卒業させており、家業と結びついた学校教育への関与もうかがわせる<sup>(17)</sup>。前述した青木岩次郎など同様に製造部門に雇い入れた者が、店員として雇用されるようになった事例も見られた。たとえば、外池善次郎は、大正10年3月に「父外池市蔵ノ後ヲ受け、職工トシテ雇、十一月一日ヨリ準店員トス」とあるように、店員として雇用されるようになった。

### 3. 昭和6年「店員調」

この史料は、罫紙1枚に書かれたもので、最初に「昭和六年度店員調」<sup>(18)</sup>とあり、昭和6年に作成されたメモのようなものである。記載項目は、「席次」「氏名」「年齢」「勤続」「給料」である。全部で18人の店員が記されているが、「七年解」と注記されている者が2名おり、この2人は昭和7年に解雇されたものと思われる。「席次」は、空欄のままであるが、「年齢」「勤続」から見て、ほぼ上位から順に記されているものと推定される。「給料」は、「八〇」「四五」「一五」「五」などと一応数字が記されている者もいるが、空欄もあり、単位も不明で正確なこ

(16) 拙稿「近江商人正野家の奉公人と給金」151頁。

(17) こうした行動は、洋薬を意識した明治22年からの白龍腦の製造販売（本村「明治期における近江商人の企業家活動」20頁）や10代目玄三が昭和14年に東京明治薬学専門学校へ入学したことなどに関係するものと思われる。

(18) 「昭和六年度店員調」（正野玄三家文書）。

とはわからない。<sup>(19)</sup>

この史料により、昭和6年時点での正野家の店員構成が明らかになる。年齢構成では、最高齢は正野光三郎の51歳であり、明記されている最年少は柚木泰六の17歳である。しかし、岡崎周六が、年齢の記載がないものの、昭和6年4月に正野家に入っており、たぶん最も若い15～16歳と推定される。そうすると、19歳以下が4人、20代前半が5人、20代後半が4人、30代前半が2人、40代が2人、50代が1人となり、バランスのとれた年齢構成となっている。

勤続年数は、明治26年に入った正野光三郎の39年を最高に、昭和6年4月に入ったばかりの岡崎周六までである。5年以下7人、6～9年4人、12～15年3人、21年1人、33年2人、39年1人であった。また、店での店員の呼称も勤続年数3年以下で、18歳以下の店員には「六」、勤続年数4～15年で、21～29歳の店員には「七」が付けられていた。

#### 4. 店務役割

これらの店員は、明治21年9月「雇人事務規程」<sup>(20)</sup>によれば、総務支配役、家則掛役、店方支配役、元蔵取締役、元蔵帳場役、庶務役、売薬帳場役、雑種帳場役、勝手番頭役、勝手取締役、店方書記役に分かれてそれぞれ勤務した。その任務は次のように定められていた。総務支配役、家則掛は、「事務室詰トシ、専ハラ一家全体ノ事ヲ努メシム」、店方支配役（元方帳場役）、元蔵取締役、元蔵帳場役、売薬帳場役、雑種帳場役、店方書記などは、「都テ商業部詰」とされた。勝手番頭、勝手取締役、下女、下男、勝手用子供は、「都テ本家部詰」とされ、店方と本家は一応区別されていた。ただし、「勝手番頭ハ本家用之事ナキトキニ限り店方エ出勤セシム」とか、「庶務掛リハ平常店方ニ出スヘシト雖トモ、時宜ニ依リ本家部ノ用務ヲ為サシム」とあり、柔軟に対応していた。

総務支配役は、「本家ノ会計ヲ所理シ、店方商業ノ前途ヲ擘画シ、其支配人ヲ

(19) たぶん、月に80円、45円、15円、5円を示すものと思われる。

(20) 明治21年9月「雇人事務規程」（正野玄三家文書）。

統轄シ、家長ノ意見ニ参与スヘシ、兼テ寒製ニ従事セシム」とあり、本家および製造も含めた店方の統括責任者であった。家則掛は、「家長ノ命ヲ受ケ家則ヲ施行シ、家則執行後ノ情況ニ注意シ、此他一家々法上ノ全体ニ付時々考案スヘキ者トス、尚臨時商品現在ノ監査ヲナサシム」とあり、家則の施行をチェックする監査役的な存在であった。元方帳場役は、「店方全体ヲ統御シ、総務支配ノ意見ヲ容レ、且商業ノ隆盛ヲ努ムヘシ、兼テ寒製ニ従事セシム」とあり、店方の統括責任者であった。元蔵取締役役は、「専ハラ商品及夫レニ係ル諸品ノ出納ヲ調査シ、兼テ売薬ノ荘置ヲ司リ、又寒製ニ従事セシム」とあり、製品出納および製造責任者であった。元蔵帳場役は、「同取締役ヲ補佐シ、商品一切ノ台帳ヲ製シ、店ダシノ出納計算ヲナシ、売薬ノ衣掛ケ及荘置ヲ為シ、兼テ寒製ニ従事セシム」とあり、元蔵取締役の補佐をし、商品の出納管理を行っていた。庶務掛は、「一家全体課外ノ事務ヲ所理シ、各課欠員アルニ際シ之レカ代理ヲ勤メ、且店方事務ノ如何ニ注目スヘシ」とある正野家全体の事務方であり、店方事務のチェックにもあたった。

売薬帳場掛は、「売薬原品ヲ雑種方ヨリ仕入及荘置品荷作品其他一切ノ仕入ヲ為シ、之レカ販売ノ手順記帳計算等売薬都テノ事務ニ従事、且検査官ニ接スヘシ」とあるように、売薬に関する管理を行う部署であった。雑種帳場掛は、「薬種雑種ノ現品ヲ調査シ、仕入発売ノ計算ヲ為シ、兼テ薬品ノ検査官ニ接スヘシ」とあり、薬種の管理を行っていた。勝手番頭役は、「家長ノ代理ヲ以テ、社寺及一時ノ代理用向ヲ勤メ、田畑ノ取締ヲ為シ、普請修繕等ノ事ヲ扱ヒ、道具取締神給事下男等ノ取締及本家部入人ノ記帳ヲナスヘシ」とあり、正野家の運営・資産管理の責任者であった。勝手取締役役は、「米方一切諸雑用薪炭漬物等一切ヲ取締リ、兼テ下女下男勝手用小供ヲ差配シ荒物取締始末ヲ為スベシ」とあり、家事の管理・運営を行っていた。店方書記は、「売薬約定証ヲ作り、支配人ノ言ヲ受ケテ書翰ノ往服ニ従事シ、書翰一切ノ送発簿ニ適用月日ヲ託シ、郵便物諸荷物ヲ各課工配布シ、店方エノ入人ヲ改メ、此他書記ニ係ル一切ノ件ヲ司ルヘシ」とあるように、店方の事務部門を担当した。



こうした役務に基づいて、総務支配役には前野金兵衛、家則掛役に今村逸作、店方支配役見習（元方帳場役）に木村捨吉、元蔵取締役に佐治虎吉、元蔵帳場役に村田治三郎、庶務方掛長（書記役兼務）に正野勝治郎、売薬帳場掛に竹村隼雄、雑種帳場役に西川岩次郎、勝手番頭役に島村清兵衛、勝手取締役に石田茂七・外池岩吉、庶務掛役（店方詰）に音六、庶務掛役（元蔵詰）に由六、店方詰（庶務掛）に与三六・鉄六がそれぞれ任命された。

そして、雇人には毎年席次が付けられ、その役割任務に就くことになっていた。たとえば、明治23年1月には「年内席次左ノ通相定ム」とあり、38人の雇人が格付けされている。1は前野金兵衛、2は佐治儀兵衛、3は木村捨吉、4は今村逸作、5は石田茂七、6は吉田茂助、7は竹村隼雄、8は増山太郎兵衛、9は村田治三郎、10は島村清兵衛であり、27の伊之吉までは店員と思われる人物が並ぶ。28から35までは、「うは」「とみ」「はつ」などの下女8人の名前が並び、最後に36から38まで「喜助」「文助」「安助」の3人の下男と思われる人物が配置されている。<sup>(21)</sup>

役務については、「年内本家部役割左ノ通相定ム」として、町用向代理に木村捨吉・今村逸作、家長代理役（家屋普請并ニ營繕方）に今村逸作、普請營繕方助手に外池岩吉、田畑見廻に島村清兵衛・外池岩吉、神仏給事并道具方に島村清兵衛・増田虎吉、雑用向并台所大裏取締に石田茂七・外池岩吉、入人改方に石田茂七、米役兼薪炭醬油漬物取締に外池岩吉、同助手に増田虎吉、荒物取始末并ニランフ一方に与三郎・鉄蔵、油番に五三六・治三六・外六、風呂番掃除隠居番に五三六・治三六・外六・下男壱人、勝手小用向に五三六・治三六・外六があつた。いずれも正野家の家事賄いを中心とする雑用が中心であった。

店方としては、「本店部年内役割左ノ如相定ム」とあり、看板先応答協議役に木村捨吉・今村逸作、勘定諸事取締に木村捨吉・佐治儀兵衛・今村逸作、雑種帳

(21) 明治19年12月「雇人ニ関スル諸規」（正野玄三家文書）によれば、この席次は、「明治二十一年一月年賀席順」とほぼ同様であり、1の前野金兵衛から36の安助に至る席順が記されている。その内訳は、「本店勤務」が19人、「支店勤務」が8人、「下女」6人、「下男」3人である。



場方に西川岩治郎，同補助に竹村隼雄，売薬方并ニ印紙改方書記方に竹村隼雄，同補助に島村清兵衛，諸製薬調合方に佐治儀兵衛・木村捨吉・村田治三郎，小用向に鉄蔵，白龍腦製造助手に与三郎が就任した。

製造担当では，「年内元蔵方役割左ノ如相定ム」とあり，土蔵取締并ニ調合方に佐治儀兵衛・村田治三郎，製薬助手并ニ諸判印刷に外池岩吉・西川岩治郎・辻音吉，重量物取扱及荷作に西川岩治郎・辻音吉，小用向に鉄蔵・五三六が就いた。

大阪支店についても，「年内大阪支店役割左ノ如ク相定ム」として，支配役に前野金兵衛，商務役に吉田茂助，書記役に増山太郎兵衛，庶務に渡部貞助・米田虎之助・深田留吉，小用に善治郎・宇之助・伊之吉，勝手用におさとがあたった。

このように多くの人々がいくつかの職務を兼ねており，木村捨吉や今村逸作などは常に中枢の管理部門に名を連ねていた。また，正野家に入って間もない者は，本家の雑用に従事していた。大阪支店の陣容は，地理的に離れていることもあり，他部門との兼任もなく，一応独立していたようである。

こうした役務割については，毎年雇人に通知されたようであり，数年分が残されている。現存する最も古いものは，明治 14 年 3 月「本店務役割」<sup>(22)</sup>である。それによれば，本店では，勘定方に前野金兵衛，同副に西村伝七，看板先応接并ニ書翰に前野金兵衛・西村伝七，同副に久兵衛，諸製薬調合方に岩谷儀兵衛・西村伝七，製薬方銭出入勘定并ニ石炭油出入改に久兵衛・勝七，製薬小売方に勝七・留六，店諸用手伝方に梅村弥兵衛・小嶋伊兵衛がなり，元蔵では，蔵取締調合方に岩谷儀兵衛，同副に佐兵衛，製薬方并ニ判押荷作り方に外池嘉七・新兵衛・弥七，蔵諸用手伝に小島伊兵衛・奥村奎兵衛，小用方に為六が任命されている。前野金兵衛・西村伝七・岩谷儀兵衛などが幹部店員として兼務しているようすがうかがえる。

大正 2 年 12 月「本店務役割」<sup>(23)</sup>によれば，「本店務役割左之通り改正任命ス」として，総務部主任に正野玄二郎<sup>(24)</sup>，同合議に木村捨吉・中西五三郎，営業係主任

(22) 明治 14 年 3 月「本店務役割」（正野玄三家文書）。

(23) 大正 2 年 12 月「本店務役割」（同）。

に中西五三郎、同補助に前野治三郎・正野光三郎、製剤課主任に中西五三郎、同補助に前野治三郎・正野光三郎、販売課主任に正野光三郎、同補助に井上康七・藤居政七、出納係主任に木村捨吉、同補助に福井源吉・井上康七、倉庫課主任に木村捨吉、同補助に福井源吉・井上康七、会計課主任に福井源吉、同補助に井上康七・藤居政七、諸事取扱主事に田中岩次郎、本家係主任に嶋村清兵衛、同補助に藤居政七、徒弟教育係に正野光三郎・井上康七・藤居政七とあり、1人の店員が3～4もの職務を相互に補助などで兼務しあいながら勤務していた。

こうした傾向はその後も続き、大正15年12月「大正拾六年度店務役割」<sup>(25)</sup>では、本店支配人に正野光三郎、同副支配人に松本仙吉、大阪店主任に松本仙吉、東京店主任に嶋村喜蔵、顧問に中西五三郎、謀議に島村喜蔵・日夏金助と幹部役職を定め、「本店各部役割」として、営業部では製剤部并装置工場に日夏金助（主任）・松村松七・西田梅七、販売部に前野弘七（主任）・松村松七・仁六・信六・彦六、薬局に正野光三郎、出納部では倉庫部に日夏金助（主任）・仁六、薬品原料仕入方に正野光三郎、電気工場係に常治、会計部に正野光三郎（取締役）・前野弘七、庶務係に正野光三郎（取締役）・前野弘七・松村松七が配属された。しかし、これらは兼任の多さでも明らかなように、「但各自受持以外ト雖、時機ニヨリ各部相通ト心得精励スベシ」とあるように、各店員の職務分担は柔軟なものであった。

こうした方法は、昭和11年1月「昭和拾壹年店務役割」<sup>(26)</sup>においても踏襲されていた。そこでは、総務取締役補に正野光三郎、支配人に松本仙吉、副支配人に嶋村喜蔵、謀議に日夏金助・前野弘三郎がなり、「本店各部役割」として、製剤部に日夏金助（主任）・前野弘三郎・尾林仁七・岸田喜七、販売部に前野弘三郎（主任）・日夏金助・田中信七・岡崎周七・北野嘉七、倉庫部に日夏金助（主任）・岡崎周七、薬品原料仕入係に正野光三郎、会計に松本仙吉（主任）・正野光三郎、

✓(24) 正野玄二郎は、明治21年12月に8代玄三の二男として生まれ、大正14年4月7日に9代玄三を襲名した（「系譜帖 全」正野玄三家文書）。

(25) 大正15年12月「大正拾六年度店務役割」（同）。

(26) 昭和11年1月「昭和拾壹年店務役割」（同）。

庶務部に前野弘三郎（主任）・岸田善七，保険部に正野光三郎（主任）・北野嘉七が任命され，そこでも「但シ時機ニ依リ各部共通ト心得精励スベシ」と柔軟な対応が求められた。

## おわりに

以上，正野家の近代における雇用形態について，明治20年・大正2年・昭和6年の店員名簿や店務役割を中心に，個別店員の動向を具体的に見てきたが，そこでは次のようなことが明らかになった。

第1に，正野家の明治20年・大正2年・昭和6年における店員数は，18～19人と江戸時代とほぼ同様であり，店員数から考えても江戸時代の経営規模と大きくかけ離れることはなかったようである。昭和10年代になっても，本家のある蒲生郡日野町を中心とした近江出身者の雇用が，いまだに続けられており，近江出身者の雇用という近江商人の雇用形態の特徴を堅持していた。1年に数人ずつ雇用されていたが，しだいに新規採用者は少なくなっていった。出仕年齢は10歳代前半が中心であり，江戸時代とほとんど大差はなかった。しかし，大正2年の「店員名簿」では出仕年齢が少し上昇したり，雇入月においても3・4月に多くの店員を雇い入れるなど学校教育の影響も見られるようになっていった。続柄では，戸主・養子・長男が多く，商才のある人物が雇用され，家族の生計を支えていた。

第2に，勤続年数は，一部の店員を除き，1年以内に退職する者も多く，見習い段階で解雇される者も見られた。退職理由は，病気・死亡・養子なども若干見られたが，多くは依願解雇（退店）と「不都合」などによる解雇であった。また，明治20年の「雇人名簿」によれば，高齢出仕者は，以前に正野家に一度雇用されていた人が再雇用されたり，農業や郡村の小役人をしていたものが雇用されたようである。大正2年の「店員名簿」では，店員の中には，薬学校に通わせてもらったり，製造部門に雇い入れた者が，店員として雇用されるようになった事例も見られた。

第3に、正野家では、昭和に至っても江戸時代と同様に別家制度が維持されていた。大正2年の「店員名簿」に記載されている別家となった店員は13人であり、別家になった店員は、ほとんど11～13歳で正野家に入り、19年ほど勤めて別家となった。明治45年～昭和13年の28年間に7人が別家しており、4年に1人の割合で別家が創出されていた。昭和13年には「別家格」となり、この時に別家制度の形骸化につながる変化が見られたようである。

第4に、店員は、明治21年には総務支配役、家則掛役、店方支配役、元蔵取締役、元蔵帳場役、庶務役、売葉帳場役、雑種帳場役、勝手番頭役、勝手取締役、店方書記役に分かれてそれぞれ勤務し、本家と店方とは一応区別されていたが、融通をもたせ柔軟に勤務していた。雇人には毎年席次が付けられ、その役割任務に就くことになっており、明治23年1月には下男・下女も含め38人の雇人が格付けされていた。役務は、本家部、本店部、元蔵方、大阪支店に区別され、それぞれの任務についていたが、多くの人々がいくつかの職務を兼務していた。役務割は、毎年雇人に通知されたようであり、明治14年から昭和11年まで数年分の「店務役割」が残されているが、兼務も多く、職務上の柔軟性を保ち、ほとんど以前のものを踏襲していた。

以上の点から、正野家においては、本家と本店の区別、店員の役務分担の明確化、学校教育の影響など近代化の進行の中で雇用形態における新たな変化も見られたが、根強い近江出身者の雇用や10歳代前半での雇入れ、別家制度の継続などを昭和期に入っても行っており、依然として江戸時代以来の近江商人の雇用形態が維持されていたのである。そういう経営行動を正野家がとったのも、正野家の経営規模が、大阪支店を設けたとはいえ、店員数では18人程度と江戸時代とほとんど変わらないものであり、さほど急速に近代的な雇用への移行を積極的に促進する必要がなかったからであろう。

〔付記〕本稿作成にあたっては、史料所蔵者である正野玄三家・滋賀大学経済学部附属史料館をはじめ、日野町教育委員会の日永伊久男氏ならびに近江商人研究ネットワー

ク会議（末永國紀氏）の方々には、大変お世話になった。ここに、記して感謝の意を表すしだいである。

なお本稿は、平成 15 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）「近江日野商人の経営史的研究」による研究成果の一部である。